ワキガのギャングに憧れて

ユフたんマン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワキガのギャングの力を持って、ヒロアカの世界へと転生した少年はこう思った。

「やったぜ！これで俺もヒーローに!!」

しかし現実はそう甘くはなかった。少年はその楽観的思考が一瞬にして砕かれることをまだ知らない…

目　次

プロローグ ―― 1
一話 ―― 8

プロローグ

僕は今、非常に困惑している…

『オイオーイ、そんな玩具じゃあ俺達の力は使えねーゼェ？』

『ソウダソウダー!!』

『ソンナコトヨリ飯ィ食わセロォ！働いてやんねーゾォ!?』

よく百均に売っている音が鳴る銃で遊んでいたら、額に番号が書かれた小人が現れ、ギャアギャアと騒いでいたのだ。そこで僕に電流が走る。

膨大な情報が頭を駆け巡る。気分が悪くなり、幼い身体では耐えることも出来ず、そのまま気を失ってしまった。

▽▽▽

目を覚ます。そして僕…いや、俺は全てを思い出した。さて皆さん、ここで質問です。貴方は転生というものを信じていますか？実際にあると思いますか？

A．ありました。

俺はどうやら転生したようだ。前世の記憶を思い出し、その情報量に身体が耐えられず気を失ってしまっていた。

そしてこの世界は前世の漫画であった『僕のヒーローアカデミア』の世界だ。オールマイトも存在するし、雄英高校も存在する。そして最も、この漫画で重要になる『個性』なる力も存在している。

そしてふと、俺の頭の上で騒ぐ小人達に意識を向ける。

『オイオイだらしネーナッ!!』

『そんなので俺達を使いこなせんのカー？』

『マダ子供ナンダシ仕方ねーヨォ…』

『ウルセー！』
『ウワァーンッ!!Ｎｏ．３がブったァァァ!!』
『そんなコトヨリ飯をクレェ!!』
うるさい…恐らくだがコイツらは『ジョジョの奇妙な冒険』で登場する幽波紋、『セックス・ピストルズ』だ。額に数字書いてるし…４がいないし…
コイツらが俺の個性なのだろう。二次創作とかでよくある他作品の能力を持ったオリ主が別の作品の世界で活躍するとかそういう奴だろうと自己完結する。何か深く考えもわからないので仕方ない。
まぁ色々と言いたいことも沢山あるが今は置いておこう。それよりもこれからどうするか、だ。せっかく漫画の世界に来たのだから、原作に関わりたいと思うのも仕方ないじゃあないか。しかしそれには危険が伴う。原作には敵連合という死柄木率いるヴィランに幾度となく襲撃されるのだ。まだ完結してないのもあるため、俺が介入することによって、今後の展開が変わるかもしれない。
俺の個性？のセックス・ピストルズは対人には強いと思うが、脳無や切島等には弾かれたり、無効化、決定打にはならないだろう。それにセックス・ピストルズは暗殺向きだ。お世辞にもヒーロー向きとは言えない。しかしだからといって普通に暮らして来た俺がヴィランになれるはずもないし、今まで通りの職に就くのも何か違う気がする。
そこで俺は考えた。そして辿り着いた答えはこれだ。原作に介入して序盤の内に強化される前の死柄木をボコして捕まえてやろうと。序盤なら俺のセックス・ピストルズ達でも十分可能だろう。多分…オール・フォー・ワンが出てきたらオールマイトに任せよう。援護ぐらいはできるんじゃあねぇかな、うん。
そして武器に関しては銃弾の代わりに石やスーパーボールを使う、というものだ。アブノーマルなメダカが箱の中で学園生活を送る（適当）漫画でそんなキャラがいた気がする。
しかし通常の物ではすぐに壊れてしまうため、父に頼み特注品を用意してもらう。今世の親は裕福なので便利だ。しかしそうとなれば

すぐに特訓しよう。地下室に特訓ルームを作ってもらおう。
銃も勿論使うが、基本的にはスーパーボールやゴム弾がメイン武器となるだろう。
セックス・ピストルズに適当に飯を与える。喧嘩にならないように６つに分けてだ。しかしＮｏ．３がすぐに食べ終え、Ｎｏ．５の飯を奪い取り、泣かしたのを見て溜息を吐いた。
ここは保育園かな？

▽▽▽
父に特訓ルームを作ってもらい、普通のスーパーボールで練習する。特訓ルームは金庫の中のような場所で、壁も天井もツルツルだ。セックス・ピストルズ達にも協力してもらう。まずは一つからだ。部屋の端に的を設置し、的に向けて投げる。当然コントロールも滅茶苦茶なため、的とは違う方向に飛んでいくが、Ｎｏ．１がそれを蹴飛ばし、Ｎｏ．６にパスし、そのまま的へとシューッ!!超エキサイティンッ!!
銃弾の代わりにスーパーボールを代用するというのは可能ではあったが、やはりというかなんというか…威力が足りない。俺の腕力が弱いことが問題なのだろうが…ひとまずボールをコントロールすることを優先する。力、威力は二の次だ。
そこから数ヶ月かけて二つ、三つと増やしていき、四つを試していた時に事件が起こった。
いつも通り、スーパーボールを四方八方に投げ、バウンドするボールをセックス・ピストルズが巧みに蹴り上げ、ボールを身体の一部のように操る。
このまま的へッ!!シュー「おぼっちゃま、オヤツの時間で御座いま

す」
『アアーーッ!!ドアが開イタせいでボールが狂っちまっタァア!!』
ちょうどドアに向かっていたボールが、急に開いたドアに弾かれ軌道を逸らし俺のゴールデンボールにシューッ!!オウホァ…ッ
『だから4ッて数字は縁起が悪ィんダァア!!大丈夫かァ!?』
「た、玉が…増えた…」
『大丈夫じゃあねーゼ!!?爺やッ!!ドクターを読んでクレェェーー!!』
ウゴゴ…ッ、やっぱり4…は…ッ、縁起が…悪イッ…!!

▽▽▽
あれから俺は4という数字を嫌うようになった。あれ以外にも、ケーキが4当分に切り分けられていると、それを食った後腹痛に襲われたりと、散々な眼にあってきたからだ。
元々セックスピストルズ達は4という数字を忌み嫌っていた。そのため、だから言っただろ!とか色々と言われてしまった…
ついでに言うと、今更だが俺の個性、セックス・ピストルズは俺以外の人間にも見えていた。これで俺が、独り言をブツブツと言う頭がおかしい奴と思われずにすむ。
中学校に上がると、ハワイの別荘で銃の訓練を始めた。夏休みといった長期休暇でしか訓練出来なかったが、それなりに上手くなったと思う。最初の方は、ボールと速度が段違いだったため、連携がズレたり空振ったりが多かったが、今ではミスはほぼない。体調が悪かったり寝不足だったり精神的に疲れていれば失敗することもあるが…
休憩がてら、プライベートビーチで寛ぐ。いやー、金持ちってのはいいなー!
「お隣、いいですか?」
「ああ、いいぜ」

隣にグラマーな少女が座る。黒髪のポニテ、大きい胸…そう、みんなご存知の八百万百だ。父と百の親が旧友であるらしく、八百万家とは昔から関わっている。やったぜ！モモパイを拝めるとは夢にも思わなんだ。
「あ！見てくださいッ!!お父様達が手を振ってますわよ!!」
海に見えるクルーザーには、いい歳したオッサン達がアロハシャツを着て満面の笑みで手を振っている。
「いい歳してなァにやっているんだか…子供じゃあねーんだからよォ」
「いいじゃないですか。ここには私たちだけしかいませんし、お父様達も普段からのストレスを発散されているのでしょう」
「そりゃあよォー、俺もわかってるぜ？親父も上に立つ人間だしなァ…俺には真似出来ねーぜ。ってオイッ!!ピストルズッ！俺のポテトチップスを食うんじゃあねー!!さっきロコモコハンバーグ食わしてやったばかりだろーが!!」
『ウルセーー！俺達は腹ァ減っテンダッ!!』
『コレカラドーセまた特訓するんダカラヨーッ！コレくらいイイじゃあネーカヨ！』
そう言われるとこっちは何も言えない。酷い時は朝まで特訓に付き合ってもらってるからな…このチップスはご褒美的なヤツとしてピストルズにやろう。
「しょうがねぇなぁ…」
『『『『ヤッターッ!!』』』』
だが今日は朝まで特訓に付き合ってもらうから覚悟しとけよなぁ。
するとクスクスと面白おかしそうに笑う百の姿が目に入る。
「何かおもしれーことでもあったか？」
すると手をフリフリと振りながら微笑む。
「いえ、その…大変仲がよろしいのですね」
「うん？まあコイツらは兄弟みたいなもんだからな。」
心底羨ましそうにする百。そう言えば大体百と会う時は昼寝の時間だったからな。こうして起きて騒いでいるピストルズを見るのは

初めてなのだろう。
「羨ましいですわ…私はひとりっ子ですし…学校でも貴方方のように打ち解けて話せる方もいませんし…」
「まぁその内出来るとは思うんだが…よければだが俺がその打ち解けて話せる奴ってェのになってやろうか？」
「貴方は元々含まれていますわ」
あ、そうですか…結構恥ずかしいことを言ったんだが…軽く流されてしまったな、うん。

▽▽▽
「行けッ!!セックス・ピストルズッ!!」
『『『イイイーーーーッハァァァーーーーーーッ!!!!』』』
「Ｎｏ．１とＮｏ．２は周りのヴィランを確認次第報告しろッ!!!」
『ワカッタッ!!今日はコレが終わっタラゴ馳走ダゼーッ!!気合い入レロヨーッ!!』
『オオーッ!!』

遂に入試の日がやってきた。原作と同じくロボのヴィランと戦闘中である。筆記はまぁそこそこ自身があったため問題ないだろう。馬鹿っぽい芦戸と上鳴が合格していたため、この実技で良い結果を出

せば普通に合格出来るだろう。
《標的補足、ブッ殺ス!!》
　現れた受験ロボットに、申請して許可された拳銃を使い、ミスタのようにピストルズを扱い鎮圧していく。
『４時の方向にヴィランが４体イルゼー!!』
「無視だ無視!!他を探せ!!」
　Ｎｏ．１からの報告は不吉なため無視し、新たにＮｏ．２が発見したヴィランへと駆けていく。道中、瓦礫やヴィランの残骸に足を取られたりしている奴がいたため、救助ポイントを稼ぐために、特注のボールを投げて残骸を破壊し助けていく。
　すると残り数分の合図が聞こえ、ピストルズに警戒するように促す。奴が…来るッ!!

　轟音を出しながら現れたのは超巨大ヴィラン。ポイントは０のため、最初は倒してやると息巻いていた受験生たちも、恐怖からか、その場から全力で逃げ出す。
　因みに俺は倒す手段がないので逃げた。銃でどうやって倒せと？重要な箇所に銃弾を撃ち込めば倒せるかもしれないが、そんな場所専門家でもないしわからん。ヒロインの麗日や主人公の緑谷達はこの会場にいなかったため、そこから何も起きず試験は終了した。

一話

はい、ただいま自室でヤオモモこと百と共に雄英高校からのお手紙を開封しております。封を破き中に入っていたのはプロジェクター。スイッチを入れるとホログラムが現れドアップのオールマイトが投映された。

【私が投映された!!】

知ってた。

「あら、あまり驚かないのですね？私は驚きすぎて口が空いたまま結果を聞いていましたわ…未熟です…」

「いやッ！俺も表に出てないだけでめちゃくちゃ驚いてるから!!」

落ち込む百に取り敢えずフォローする。

『オイオイ、静かにしてクレヨーッ!!聞こえネーダロ!?』

『ソウダソウダーッ!!』

『結果次第でご馳走にアリ付けるかもしんネーンダゾ!!』

「あぁ、わり～わり～。というかやっぱお前らご馳走目当てなのな…」

ピストルズに怒られてしまった。だがピストルズにとっては飯が一番大切なのだ。飯があればどんなことでも言うことを聞くが、なければストライキする。なかなか面倒臭い個性だが、長年一緒にいると本当の兄弟のように居なくてはならない存在へと認識が変わった。

さて、そろそろオールマイトに戻ろう。

【早速合否判定と行きたいところだがァッ…!!先の入試!!見ていたのは敵Ｐだけにあらず!!隠し要素として救助活動Ｐ!!しかも審査制!!我々雄英が見ていたもう一つの基礎能力!!

銃操（じゅうそう）　我六（がろく）、敵Ｐが３９Ｐ!!救助活動Ｐが２８Ｐ!!合計６７Ｐ!!ランキングは５位、つまり合格さッ!!来いよ銃操少年！ここが君のヒーローアカデミアだ!!】

『『『『『ヤーーーリィッ!!今夜はご馳走ダァァァァァッ!!』』』』』

「おめでとうございます我六さん!!私と一緒に学校へ通えますわね!!」

狂ったように踊りながら狂喜乱舞するピストルズ達。お前らいつ

も豪勢な飯食ってるってのにあれで満足出来ねーとかどれだけ舌が肥えてんだよ…
そして隣では満面の笑みで俺の腕に抱きつきながら……おうふ…ヤオパイの柔らかな感触が腕に…
百も気づいたのか顔を赤くし俺から離れる。あぁ…残念…。
その後気まずい空気が部屋に流れたのは想像に難くない。

気まずい空気を破ったのは部屋に突入してきた親父だった。今夜はパーティーらしい。百の家族も呼んで行うらしい。
そうして始まった合格祝いのパーティー。いつも飯を作ってくれているチーフ達が腕に寄りをかけて作った本格料理。美味しくない筈がなく。
「ウンまああ～いっ!!!!」
前世でも食べた事ないような贅沢なお味。これにはピストルズ達もご満悦のようでムシャムシャと奪い合いながらも一生懸命頬張っている。作法がなっとらんぞ作法が！俺がジョージ父さんなら皿を下げさせてたぞほんと。

そしてパーティーも終わりを近づき、皆酒を飲んだりスイーツを食べたりという終盤、酔いに酔った親父が爆弾を落としていった。
「ヤル時はゴムをつけるんだぞ」
「ゴウフッ…!!?何言ってんだよ親父ッ!!」
ブゥーッ!!と口に含んでいたジュースを噴き出してしまう。幸い誰にもかかる事はなかったが、隣に居た百には聞かれてしまった。
「…?ヤルとは…何をするのでしょうか…?ゴムが必要…少し考えさせてください…」

恐る恐る隣を見ると、そこには首を傾げて本気で考えだす百の姿が。色々な知識は豊富だけど性知識は無知とかたまらんッ!!じゃなかった。やめなさい百!メッ!!

▽▽▽

春、それは高校生活の始まり。百と一緒に登校した俺は、原作通りに話しかけてきた飯田に挨拶して自己紹介する。そして名簿を見れば砂藤の文字が名簿から消えていた。本当に申し訳ないが俺という異物が紛れ込んだため、定員に入れず落ちてしまったのだろう。多分滑り止めの普通科にいるかもしれない。

百と談笑しながら先生が来るのを待っていると、ぶどう頭の峰田が血走った目で凝視しているが無視する。残念だったな（杉田）!!ヤオパイは既に俺のものだッ!!（違う）

少し経つと金髪ＤＱＮの爆豪が入室しドカドカと歩き、机に足を乗せ席に着く。そしてすぐに爆豪に注意しに行く飯田。見覚えのある光景。そしてここから…

そらきた…主人公の登場だ。オドオドとしながらヒロインの麗日と話す緑髪の少年、緑谷出久。オールマイトから認められ、オールマイトからワン・フォー・オールを受け継いだ原作主人公。

ここまで俺という異物が混じり原作に影響が出ていることは砂藤がＡ組からいなくなったぐらいだと思う。しっかりヘドロ事件も起きてたし、こうして緑谷も入学出来てるし。

そして緑谷の後ろで寝袋に入り蓑虫状態で現れたのはドライアイ

の相澤先生だ。入ってくるなり直ぐに自己紹介をし体操服を配られ、グラウンドに放り出される。
「「「「「「個性把握…テストぉ!!?」」」」」」
そう、原作と同じ個性把握テストが始まった。最下位は除籍処分と言われ、最後は合理的虚偽として誰も落ちることがなかったあのテストだ。しかしあの結果は相澤先生が全員の価値を見出したことでの結果のため、俺がヘマすれば除籍される可能性が出てくる。本気でやらねーとな。

▽▽▽

「行けッ!!セックス・ピストルズッ!!」
「セック○・ピスト○ズ…なんて卑猥な名前なんだ…!」
後ろで変な事を言われた気がするが、今は無視する。後で絞めるから覚悟しとけよ峰田!
現在俺が行なっている種目はソフトボール投げだ。他の種目は?となるだろうが見所なしなのでキング・クリムゾンさせてもらった。まぁ今のところ全部中の上辺りだから問題は無さそうだ。
『『『イイイーーーッハァァァァーーーーッ!!!!』』』
ピストルズ達が、俺が投げたソフトボールを次々と蹴っていき、最後は３００ｍを超えた辺りで地に落ちた。今の所は爆豪、麗日に続き三位だが、時期に緑谷と百には抜かれてしまうだろう。というか個性把握テストってピストルズが使える種目少なくね!?今更だけどさぁ…
後、俺が活躍した種目は長座体前屈だな。ピストルズにものさしを持ってもらい、そのまま射程距離ギリギリまで持っていってもらった。銃やボールは使わせて貰えなかったから５０ｍ程しかいかなかったが、それでもトップになれたのでよかった。
総合はやはり中の上。百が一位、そして緑谷が最下位と原作通りとなり、先生が合理的虚偽とカミングアウトし緑谷が発狂。よかった…

これで原作通りの展開になる…一番怖いのは原作が崩壊し、ヒーロー側がヴィラン連合に敗北することだ。それだけはどうしても避けたい。バッドエンドは嫌い…というか自分の命が掛かっているから絶対になってはならない。それに関しては砂藤と入れ替わりA組に入れてよかった。砂藤は原作でもあまり活躍していなかったし重要キャラというわけではなかったからな。緑谷と入れ替わっていたら俺は自主的に除籍されるつもりだった。だって緑谷がいなかったら詰みだしね。

安堵の涙を流しながら項垂れる緑谷を尻目に相澤先生は職員室に帰っていった。

何やら先生に見られていた気がするのは気のせいだろうか…

そして下校。百と一緒に帰路に着く。

「我六さん…今日はどうなさいました？何やら考え事をしているようでしたが」

「!?…いや、何でもねーぜ。ちっとばかしくだらねぇこと考えてただけだよ」

そう言われてハッと気付く。そういや今日は百意外とほぼ喋ってねーなと。原作のことを考え過ぎてロクに喋れなかった。今思えば俺が介入したとしてもほぼ原作変わんねぇな…マスコミ騒動や重要なヴィランと関わらない限りほぼ原作は崩れない。差異はあるだろうが結果はほぼ変わらない。過程が変わるだけだ。よぅし、明日からバンバン話しかけて仲良くなってやるぜぇ!!

と思ったけども俺ってばコミュ力無いんだった…百は幼馴染だから除外。